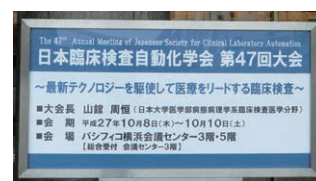


## ◆◆◆ 日本臨床検査自動化学会 第47回大会 参加報告

会期：2015年10月8日(木)～10日(土)

会場：パシフィコ横浜 会議センター及び展示ホール



### 《特別講演》良い医療の受け方 — 医師として大切にしていること、伝えたいこと 天野 篤 先生(順天堂大学医学部・大学院医学研究科心臓血管外科学講座)

報告者：熊川 良則 (検査科免疫血清係)

演者である天野篤先生は、日本でもトップクラスの心臓外科医です。2012年には天皇陛下の心臓病バイパス手術を執刀されました。その際、人工心肺は使用せず心臓を動かしたまま手術を行ういわゆる「オフポンプ手術」を実施され大変話題となりました。

今回の講演では、天野先生が心臓外科医として現在に至るまでの経緯から医療関係者全体に向けての貴重なメッセージまで、非常に感動的な内容でしたので以下にご紹介します。

#### 1. 心臓外科医として現在に至るまでの経緯

天野先生が高校2年生の時、父親が心臓弁膜症で心不全を起こし救急車で病院に入院されたそうです。その時に「いつか医者になって父の力になりたい」と考えるようになり、3浪して日本大学医学部へ入学されました。医学部の2年生の時に父親が僧帽弁狭窄症を患い生体弁置換術を受けます。この手術により父親が劇的に回復したことから、心臓外科の素晴らしさを真近で感じ心臓血管外科医を目指すことを決めたとのことでした。

卒業後は稼げるようにならなければという思いから、早く一人前の医者になりたいという強い信念が医学部在学中から湧いてきたそうです。先生は大学卒業後、できるだけ手術数の多い病院を模索する中で先輩の勤務していた亀田総合病院へ就職されます。ここで初めて完成された心臓のバイパス手術と出会います。また、この病院で先生は同年代の外科医より圧倒的に多くの手術を執刀され心臓血管外科医として大きく成長されます。多くの手術を経験する中で手術の費用対効果についても考えさせられ、手術の道具を無駄にせず必要なものに投資しなければならないことも学んだと語られていました。

その後先生は新東京病院に移られ、在籍の10年間で約3,000症例の手術をこなされます。これにより心臓血管外科医としての自信を深めていられました。また、この病院は常に新しいチャレンジを続けており、有能な病院経営者や尊敬でき憧れを持てる心臓血管外科医と出会うことができたことなどが自分にとってとても大きかったそうです。その後、昭和大学横浜市北部病院の勤務を経て2002年から現職の順天堂大学医学部に勤務され現在に至っています。

#### 2. 天野先生のライフワークとなった「オフポンプ手術」

1997年新東京病院時代に心拍動下冠動脈バイパス術(=「オフポンプ手術」)と出会い、こ

れが先生のライフワークとなります。そして、2000年頃からはほとんどの心臓のバイパス手術をオフポンプ手術で実施されるようになります。

先生がこのオフポンプ手術にこだわる理由を解説してくださいました。

◎人工心肺を利用した手術よりも圧倒的に患者の死亡率が低いことに加え、10年後の長期成績も非常に良好なこと。

◎腎不全・透析患者や糖尿病患者においても心停止下冠動脈バイパス手術に比べ生存率が格段に高いこと。

◎糖尿病や高血圧の患者がこの手術を受けても、寿命が一般的な寿命とほぼ変わらないという結果がでていること。

◎カテーテル治療が困難な患者でも心拍動下で安全に手術でき、バイパスが機能すると再治療に至る頻度が低いこと。

ただ、人工心肺を使用した従来型の手術よりも難易度が高いため、術者の高度な技術が要求されます。また、豊富な経験や迅速さもあわせて要求されます。講演の中で、先生がオフポンプ手術で心臓手術をしている様子を映像で見せていただきましたが、血管の縫合など素晴らしい手さばきに感動しました。

### 3. 医師として大切にしていること、そして伝えたいこと

講演の後半では某大手牛丼チェーンのキャッチフレーズである「早い・安い・うまい」が手術の際にも大変重要であることを話されました。オフポンプ手術だけに限りませんが「早い (soon & quick)」は、手術は出来る限り迅速に！手術時間が長くなればそれだけ患者さんの心臓や体に負担がかかります。「安い (low cost & unwasted)」は、効率的に手術を行うことは経済面で患者さんの負担軽減となり、「うまい (skillful & good-looking)」は、常に手術のスキルアップを心がけることで、高度な手術を安全にこなすことができるそうです。この3つを実行することは患者さんや患者さんの家族に対してだけでなく、一緒に働いているスタッフにも無理な負荷がかからないため、チームワークのとれた最良の手術へとつながると語られました。

講演の最後に、小学校3・4年生の道徳の教科書に掲載されている「働いている姿が輝いている人たち」で取り上げられている先生の強い思いを示した一節を紹介されました。

「心臓の手術は医者が途中で“もうできない”と思った途端に患者の生命が失われてしまいます。このため、手術の前には何度も手術の様子を思い浮かべて細かく対応の確認をします。こうすることで、手術中に何かあっても次の方法が思い浮かぶので、落ち着いて行動ができます。ぎりぎりまで自分のできることに全力を尽くすことが、患者さんの命を救うことにつながっています。」と記載されているそうです。

臓器の予備能力が低く合併症に弱い高齢者の手術では、上記の事項は特に重要で留意が必要です、と話され本講演を締めくくられました。